

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所

〒259-1293 平塚市土屋 2946

神奈川大学湘南ひらつかキャンパス

Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

生命のアナロジーに学ぶ経営組織論

湯川 恵子

経営組織論に対して感じていることがある。それはなんと説明しにくい学問だということだ。「複数の人が組織の中で協働しながら目標を成し遂げるプロセス」と説明することができるが、文字で表現したとしてもこの学問分野が抱える難しさが軽減されることはない。もちろん他の学問分野も同じように難しさを内包しているはずなので、経営組織論が他と比較して格段に難しいなどと主張するつもりは露ほどもない。

いわく説明しがたい難解さは、社会科学が元来もつ学問的性格と大きく関わっているのではないかと考える。社会科学は社会の仕組みや諸現象を解析し、より良い社会のあり方を追究する学問分野である。社会を構成する主体として人間の社会的相互作用を扱っているゆえに、再現性はほとんど保証されない。つまり人間の行動に再び同じ現象が起こるかどうかは、誰にもわからない。しかしわからないなりに理論構築を図ってきたこれまでの経営学者の業績は偉業というほかない。

1900年代初めにアメリカではテイラーが科学的管理法による大量生産システムに道を拓き、フランスではファヨールが管理(administration)を「計画し、組織し、命令し、調整し、統制するプロセス」と定義づけ、経営管理の父と称されるようになった。20世紀初頭に現れた巨人たちの功績によって、企業経営が経験と勘の世界から科学的考察に基づいた論理と実践の世界に歩みを進めることになったのは言うまでもない。

経営組織論においては、バーナードが『経営者の役割』のなかで組織を「二人以上の人々の意識的に調整された活動や諸力の体系」とした協働システムがバイブルとなり、今日、経営組織論の父と称されるに至っている。経営学の源流をたどっ

ていくと経済学にそのルーツを見ることができる。さらにさかのぼれば最終的には学問の起源である哲学にたどりつく。

JT生命誌研究館館長の中村桂子氏はバチカン博物館にあるラファエロの「アテナイの学堂」の絵に描かれたギリシャ哲学者のプラトンとアリストテレスの描き方に興味深い解説を加えている。右手で天を指し世の中の普遍性を説くプラトンと、右腕を前方へ押し出し掌を地に向け世の中の多様性を説くアリストテレスが並んでいる姿を描いた画家は、二人の哲学者をまったく同じ大きさで描くことで、普遍性も多様性も両方に同等の目配りをしなければ物事の本質は捉えられないということ、現代の私たちに語りかけていると説明している。

学問の道は多様であり、その方法も多岐にわたる。メソッド(方法)の原義はギリシャ語のメタホドス、すなわちメタ(沿って)・ホドス(道)である。道のかなたの普遍の真理をたずね、それを問う方法論は学問の基礎であり、どの方法論を使って真理に到達するべきか、そこが重要であろう。

例えば生物学者 Miller の「Living Systems」によると、細胞・器官・有機体・集団・組織・社会・超国家システムの7つの階層で、個と全体の関係性とそれぞれの断層における構造的普遍性が主張されている。つまり生命のアナロジーに経営組織が学べきことはおおいにあるということである。「企業のお手本は競合他社」ではなく生き物であり、生命を基本とする経営組織のありかたを追究することは、主体である個人が普遍性と多様性という矛盾のダイナミズムのなかをどう生きるのか、という我々の生き方そのものを追究することと重なり合う。この点で経営組織論は難しい学問であると同時に、知的に興味深い営みであるともいえよう。

(所員/ゆかわ・けいこ)

私の英語教育の原点：ニューヨーク

河内 智子

4月より経営学部に着任しました河内智子です。どうぞよろしくお願いいたします。

今回は、私が大学院留学時代、1年4か月ほど滞在した米国ニューヨーク市の思い出について書きたいと思います。本格的に英語教育について学ぶのは当時が初めてでしたので、ニューヨークは私にとって英語教育の原点ともいえる場所です。

現地に渡ってまず痛切に感じたのは人種の多様性です。私が進学した大学院では、英語教授法プログラムの附属機関として **Community English Program** という語学学校がありました。



Community English Program で最初に教えた生徒たち

この学校は、英語教授法専攻の大学院生たちが地域に住む移民や留学生、海外赴任者やその伴侶などに英語を教える学校で、大学院生たちにとっては英語教育の実践を積むと同時に様々な教授法を試し、その成果を研究するための実験室といった位置づけでした。一方、地域の住民にとっては破格の授業料(確か2時間授業が週3回、10週間で10ドル程度でした)で実践的な英語を学べるというメリットがあり、お互いにとってウィン・ウィンのプログラムだったと思います。

授業初日、教室に行ってみてまず驚いたのが、生徒の多様性でした。中南米からはメキシコ、ペルト・リコ、コスタ・リカ、ペルーなど、アジアからは日本、韓国、中国、そして欧州方面ではイタリア、

ロシアなどから来た生徒がいました。「生徒」と言っても年齢もまた多様で、下は10代の若者から上は60代の女性までおり、当時20代だった私にとっては英語を教える一方で人生については教えてもらうという状況で、大変刺激的でした。また、彼らは英語をどこか遠い国の「外国語」ではなく日々の生活

の向上に欠かせない「第二言語」として学んでいるためモチベーションが高く、グループワークをさせると初級レベルのクラスでも議論が白熱しました。そんな中、デ

ィスカッション中はやはりどちらかというとおとなしめの日本人の生徒が、文章を書かせたり読ませたりするとしっかりと読解力や文法・語彙力を発揮するのを目の当たりにし、日本の英語教育も決して捨てたものではないなど認識させられることもありました。生徒たちとは教室内だけではなく時には **Field Trip** と称して博物館や **Farmer's Market** など、街なかを繰り出して授業をしたり、またある時にはギリシャ料理のレストランを営む生徒のお店にみんなで行って食事を楽しんだり、まさに「生きた英語」を使って交流をしました。

有難いことに、場合によっては自分の子どもぐらいの年齢の、半人前の教師である私に対してもみな敬意をもって接してくれました。ただ、中には本国ではエンジニアであったり建築家であったりと高度な技能や学歴を持っているにもかかわらず、本国でそうした仕事に従事するよりも稼ぎがよいからか、米国で駐車係やレストランの給仕として働いている生徒もおり、それでも明るく生きている彼らを見るにつけ複雑な思いに駆られることもありました。

また、共に机を並べて勉強した同級生も様々な国から来ていました。とりわけ英語教授法のプログラムは半数以上が留学生で、台湾人の同級生に誘われて台湾料理を食べに行ったり、キプロス人の同級生の誕生会に誘われてクイーンズ地区にあるギリシャ人街に出かけたりと、毎日の生活が異文化体験の宝庫でした。

さらにマンハッタンの街なかにも様々な人種の

研究余滴

人々が混在しているため、外国人でもすぐに溶け込むことができる包容力が街全体にありました。私自身も渡米数日後に観光客に道を尋ねられ、早くもニューヨーカーの一員になったようなくすぐったい気分を味わいました。

滞在中はこうした異文化体験に加え、授業や実習の合間を縫ってミュージカルやオペラ、美術鑑賞なども堪能することができ、大変充実した1年4ヶ月でした。今後も当時の英語教育と異文化に対する興味・情熱を忘れずに、英語や異文化交流の楽しさを学生たちに伝えていくことができればと思っております。
(所員/かわち・ともこ)



同級生・生徒たちと Bryant Park にて

他所のキャンパスで見かけたいいこと二三

(常任委員/泉水英計)

昨年度、平塚を離れ琉球大学で国内研究期間を過ごした。米軍統治下で設立された同大には、ランド・グラウンド・カレッジという理念があるという。高等教育・研究機関は象牙の塔に引き籠もるのではなく、一般社会に開かれたものであるべきだとする考え方だ。例えば、毎週平日の夕方に学部毎に「スタッフセミナー」が催される。教官が交替で演壇に立つが、専門家でない聴衆にもわかる言葉で自己の研究を紹介していた。研究成果の社会への還元はもちろん、学生や同僚が詰めかけても学内の風通しを良くする適切な機会を提供しているようにみえた。一般社会への開放という点では大学附属図書館に驚かされた。入口に記名帳は置いてはあるが、荷物検査や利用登録は不要でももちろん無料、朝8時から夜10時まで実質的に全く何の手続きも要求されずに、何処の誰でも自由に出入りして蔵書を閲覧できる。全面開放には様々なリスクはあるが、大学関係者にはみえない利用者が熱心に書き抜きノートを取っている姿をしばしば見かけ、その社会的意義の大きさを感じた。その他、図書館の一角には「レポート・サポート」のデスクがあり、アルバイトの大学院生が学部生の相談を受けて資料収集を支援していたことや、手狭な学食を補う弁当販売が盛んだが、容器の表面に貼ったフィルムのみ破棄して箱を回収するリサイクルが徹底していたことなど、神奈川大学には無い良い点があった。機会があれば、私たちの平塚キャンパスにも取り入れるようにしてみたい。



マレーシアへの長期留学プログラムがスタートしました！

(常任委員/行本勢基)

2013年4月より経営学部の新しい長期留学プログラムであるBSAP (Business Study Abroad Programme in Malaysia) が始動しました。タイとの国境沿いに位置するケダ州のAIMST大学へ3年次生3名、2年次生4名、合計7名の学生が一年間の予定で留学しています。中国系、インド系、マレー系、そして中近東の留学生と共に勉学に励んでおり、日本とは全く異なる環境の下で充実した日々を過ごしています。BSAPの大きな特徴の一つは、新興国として注目されているマレーシアにおいて経営学の基礎科目を英語で学修することにあります。将来的には、現地の学生を本学経営学部へ受け入れていきながら、日本と東南アジア双方の国際交流を活発化させていくことが望まれます。



クラス全体の集合写真(AIMST大学本部棟前にて)

編集後記

38号をお届けします。本号は新任の湯川恵子先生、河内智子先生にそれぞれご専門の分野について執筆していただきました。今号も写真を多く載せ、カラフルな仕上がりとなりました。(H)